

なるとDeシネマニュース

「35年目のラブレター」

発行:なるとDeシネマ実行委員会



35年目のラブレター インタビュー

映画.comより抜粋

笑福亭鶴瓶×原田知世が築き上げた実在の夫婦の“尊い愛”

「しばらく離れると『会いたい』と思うように」

Q : 実話に基づいたこの物語について、どのような感想を持たれましたか？

鶴瓶：僕はもう結婚して50年になるんですけど、やっぱり夫婦のあり方っていうのが、すごくうまいこと描いてあるんでね、それが良かったなと思います。実際、演じていても、そのことは感じたし、「(妻役が)原田さんでよかったな」と思いました。脚本を読んで、最初はまだ原田さんとわかってなかつたんですけど(キャスティングを聞いて)「うまいことしはるなあ」と思ってね。いろんな方がおられるけど、うまいこと選ぶなあと。僕はもう原田さんしか考えられへん。

原田：ありがとうございます(笑)。

鶴瓶：(撮影に)行くのが楽しかったですよ。



Q : 保と皎子の夫婦のどんなところに魅力を感じましたか？

鶴瓶：質素なことが幸せやと思える気持ちかな。保は(字を)書かれへんから、皎子が寄り添ってくれるというのはす

「昔の映画の匂いがするんです。『二十四の瞳』の雰囲気ですよね」——。笑福亭鶴瓶は、6年ぶりに主演した映画「35年目のラブレター」について、自身が大好きだという1954年公開の映画の名を挙げ、2作の根底に流れる時代の空気を懐かしむ。

実話を元に、貧しい環境に育ったがゆえに読み書きを学べずに生きてきた西畠保が、ずっと支えてくれた最愛の妻にラブレターを書くために、65歳で夜間中学に通いはじめ、奮闘する姿を温かく描き出す。

「二十四の瞳」で高峰秀子が演じた女性教師さながら、本作で保を愛情と慈悲に満ちあふれた目で見守り、支え、時に叱咤激励する妻の皎子(きょうこ)を演じているのは原田知世。並んでいるだけで観る者の心が温まるような夫婦を見事に演じた2人にじっくりと話を聞いた。



ごく大事なことで、(字が書けないということは)周りからは見えへんことだから、ある意味で(身体的な)障がいよりも大変なことだったかもわからん。それをサポートするというのは、皎子さんは本当にすごいなと思います。

原田：私は皎子さんを演じて、ここまで人を愛することができます——どこか“母”的な気持ちで保さんを見つめていて、尊敬する部分と本当にかわいい人だなって思う部分があって、すごく柔らかくて、でも芯がしっかりとあって、包み込むような愛を持った女性だと思います。保さんも、とても情が深い人で。2人の真面目でピュアな部分が共鳴し合い、互いにとって、「この人しかいない」と心から思える存在になっていたんだと思います。こんな風に同じ思いを抱ける相手に出会えること自体が、実は奇跡なのかもしれません。幸せの形っていうなんものがありますけど、西畠夫妻さの姿を見て、すごく尊い愛を見せてくれた気がしています。

Q :原田さんにとっては、関西弁での夫婦のやりとりといふのも、決して簡単ではない挑戦だったかと思います。



鶴瓶:東京の人とか、違うところの人が関西弁をしゃべると「おかしい」と言うんですけど、(若い頃の)餃子を演じた上白石萌音ちゃんから知世さんに受け継がれた関西

弁が全く違和感がないんです。これ、打ち合わせしてはるのかな?と思うぐらい、本当に良い関西弁なんですよ。細かいインтоネーションとかはどうでもよくて、すっごい良かったですよ。

原田:ありがとうございます(笑)。

Q :お2人は手紙をしたため思いを伝えたい相手はいますか?

これまでに書いたり、もらったりした手紙の思い出などもお聞かせください。

鶴瓶:やっぱり嫁ですよね。本当に嫁ですね。(結婚生活)50年過ぎましたけど、ずっと変わりなく……。(1995年の)震災のときは(住まいは)西宮なんですけど、どうしても仕事で東京に行かなあかんかった。余震が多かったですけど、あんな地震にあってるから、どうなるかわからないじゃないですか。俺は東京に行く、彼女は西宮にいる。そのときに手紙を書きました。もしかして、離れ離れになつたらあれやから…「いろんな経験を共有できてよかったです」という手紙を書きました。彼女は(出身は)四国なんですけど、僕は大阪で師匠のところで修行中は離れるじゃないですか。電話もそんなにできない。その時、手紙を書いて以来ですね。



Q :いまも手紙をやりとりされることはあるんですか?

鶴瓶:結婚記念日は手紙を交換するんですけど。

原田:素敵ですね。



鶴瓶:忙しいと言つたらアカンけど、(結婚記念日の日付は)覚えてるんですけどね。(奥さんからの)手紙が先に置いてあるんですよ。それで(結婚記念日だと気づいて)「うっ!」ってなって。もう夜の10時くらいで、そのへんのノートに書いて渡してもええんやけど、そんな雑なものアカンし、(嫁は)カードに書いてくれてるから、いまからカード買いに行こうと思って。嫁が「どこ行くの?」って言うから「いや、ちょっと行くねん」(笑)。「何しに行くの?」、「ちょっと用事あんねん」、「何買いに行くの?」って(苦笑)。そうやっていまでも渡し合いますね。結婚記念日と(鶴瓶の)入門記念日の2月14日には。

原田:私はあんまり手紙を書くほうではないんですけど、書くとしたら母と姉ですかね。東京に出てきてずっと一緒に支えてくれている2人で、だからこの映画で、餃子さんをお姉さん(江口のりこ)がずっと支えてくれていて、そこで私もちょっと思うところがあって。自分のことはもちろんだけど、妹、娘のことを本当に考えてくれる2人なので。昔はよく海外に仕事で行ったりすると手紙を書いてましたし、FAXで「今日こんなことあったよ」とか送ってたんですけど、最近はお誕生日とかに書きますね。感謝の気持ちを。

Q :保が読み書きをできるようになると奮闘する姿を描いた映画ではあるんですが、言葉ではなく、お2人の笑顔から伝わってくるものがすごく多い映画でした。普段のお2人も笑顔が印象的ですが、人生を笑って楽しく過ごすために大切にしていることや意識していることは?

鶴瓶:写真と一緒にでね、普通に笑うとそんな笑ってるよう思えない。(口角を大きく上げてニッコリと笑みを浮かべ)こうやつた方が笑っているように見えるもんやで。人生…と言つたら大げさやけど、普段から「楽しい」、「面白い」と思う気持ちをちゃんと表現しないとね。特に日本人は静かやし、そんなに表現しないでしょ? カリカリしないでね、ひとつひとつのこと面白く受け取るということが大事と思う。怒ってる人を見ても「この人、おもろいことで怒るなあ」って(笑)。

(面白いものを)探すというよりも、何でも面白く受け取るんでしょうね。今回ね、思ったのは(原田を指して)この人、ホンマに面白い、ふざけた人ですよ(笑)。



Q : 現場で面白いことをメモしていたり(笑)。

鶴瓶: そうそう。こんな人やったんや? って。人間、ふざけないとダメだなって思います。それはすごく大事ですよ。

原田: 本当にそうですね。私も根はすごく明るいほうなんだと思います。自分が大爆笑した日って、家に帰っても「幸せだなあ」って思えるし、笑うって本当にいいなって思います。そうやって笑っている人を見ると周りも笑ってしまうし、あまりよくない空気をかき消してしまうくらいの力が笑いにはあると思います。日々を「楽しむ」ということですよね。日常の何にもないことを面白がるって大事なことだと思います。

鶴瓶: 俺はそれを商売にしてますからね。「作ったおかしさ」じゃなく、自分が見た「日常のおかしさ」ですよね。その様子をしゃべって、会場にいる人に「こんな情景だったのか」と想像して笑ってもらう——それが楽しいですね。若い頃って、それが難しくて、ついさっき「これおもろいな」と感じたことを、いかにしゃべって伝えられるか? 一番新しいこと、新鮮なことをね。時間が経つと、どこかで話をつくってしまう部分があるんだけど、一番新しいことをリアルにどう伝えるかって。



Q : 保は65歳を超えて、新しい挑戦に踏み出しますが、俳優さんの仕事は常に挑戦の連続ですし、毎回、現場でも新たな出会いがあると思います。「はじめまして」の現場で上手くやっていくために心がけていることはありますか?

原田: こちらが緊張すると、それが伝わって相手も緊張しちゃうのがわかるので、年齢的にも上になってきてるし、なおさらオープンマインドで接することが大事だと感じています。そのほうが距離も縮まるし、垣根みたいなものをできるだけ作らないようにとは考えています。以前はすごく緊張しちゃってうまく話せなくて、頭の中でいろんなことを組み立てようと思えば思うほど真っ白になっちゃったりして、「私は本当はこんなんじゃないのになあ…」と思いつつ、あっという間に撮影が終わってしまって、それはすごくもったいないことだなあと思いました。あれこれ考え過ぎず、まずは現場に行ってみて様子を見ればいいし「まあ何とかなるさ」という気持ちを持てるようになって、だいぶ楽になりましたね。

Q : 鶴瓶さんは、トーク番組でゲストの方といろんなお話をされますし、時に芸能人ではない市井の人たちと触れ合い、その魅力を引き出すということをされていますけど、大切にされていることはありますか?

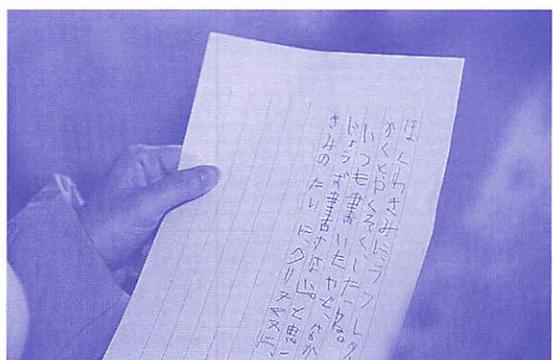
原田: 聞きたいです!

鶴瓶: 「相手の魅力を引き出さなきゃいけない」というふうには思わなくて、自然な形で自分の心情を伝えるというのが多いですね。「鶴瓶の家族に乾杯」(NHK)なんかは何にも山奥に行くと誰もいないわけですよ。

普通に考えたら、用事もないのにピンポン(呼び鈴)を押したらアカンですけど(笑)、あまりに誰もいないので、ピンポンを押さなアカン状況になったんです。それで押したら、おじさんが出てきて、俺見て「うわっ!」となって『家族に乾杯』です。見てはりますでしょ? と言ったら「はい!」って言ってくれたので「録画したまま5本分くらい溜まってるでしょ? なんで見ないんですか?」って聞きました。

そんなの知らんねんけど(笑)。そしたら「いや、ずっと見ちゃうんで…」とか言わはって、そうやって会話をして、家に上げもらいました。

その場にあること、そこで感じたことをいかに自然にしゃべるかってことなんですね。



なるとDeシネマ シネマ通信

生活にうるおいと楽しみを！そして、明日の元気を！

(1)なるとDeシネマ初代代表榎八枝子さんが逝去されました。



映画館のない鳴門の町で映画を観たいという多くの方々の声に奮起され、有志を集めて「なるとDeシネマ実行委員会」を立ち上げられてから昨年で20年。文化芸術への熱い思いと並々ならぬ探求心、実行力で実行委員会をけん引してこられました。20周年という節目を機に、次世代へ代表のバトンを託された第43回「今夜ロマンス劇場で」上映会を終えた一週間後の旅立ちでした。

なるとDeシネマ実行委員会は、今後もずっと榎さんと共に共有した、単に映画鑑賞をするだけでなく、より楽しく、充実した映画会になるよう工夫を続けていくことを誓い、ここに集ったシネマの仲間と一緒に、心よりご冥福をお祈りいたします。

(2)2024年12月「今夜、ロマンス劇場で」 映画から飛び出したお姫様と助監督を！

会場の入り口付近に毎回恒例になっている映画にちなんだ飾りつけをしました。モノクロ映画の中から現実世界に飛び出して来た綾瀬はるかさん演じるお姫様と、映画会社の助監督を演じる坂口健太郎さんとの切ないラブストーリーです。そこで映画から飛び出して来たというところに想像力をはたらかせ、トルソーにお姫様をイメージしたドレス、白シャツにベスト、ハンチング帽、スラックス等で助監督のイメージを作り上げました。

来場してくださった“なるとDeシネマ”ファンの方に上映前のワクワク感を味わって頂けるように工夫しました。



(3)小川直樹さんの写真展(鳴門の色)

映画にちなみ、鳴門市在住の写真家小川直樹さんのご協力により、作品「鳴門の色」を展示しました。モノクロ写真、カラー写真を含め鳴門の海、海で働く人、また、景色の写真、9点の作品が展示され、映画鑑賞に訪れたお客様が興味を持って作品を鑑賞してくださいました。



(4)懐かしの映画ポスター展

モノクロ映画ポスターとカラーポスターの今昔。懐かしい映画ポスター「ラストサムライ」や珍しいポスター「小さな恋のメロディー」「雨に歌えば」等も見て頂きました。

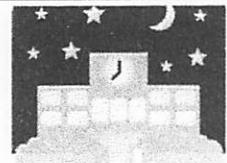


文部科学省は、映画「35年目のラブレター」とタイアップしています。

文部科学省 HP より一部抜粋

夜間中学とはどんな学校でしょうか？

夜間中学校とは、義務教育を修了しないまま学齢期を経過した方や、不登校などの様々な事情により、十分な教育を受けられないまま中学校を卒業した方、外国籍の方などの、義務教育を受ける機会を実質的に保障するための中学校です。



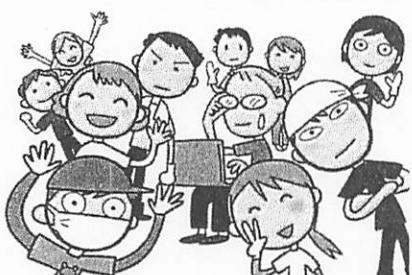
「教育機会確保法」の成立

平成28年12月に、「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」が成立しました。本法律により、地方公共団体は、夜間中学における就学の機会の提供、その他の必要な措置を講ずるものとするとされました。

SDGs

また、SDGsの観点からも、2030年の目標に向け、国内の外国人が国民と同様の教育を受けられるよう、夜間中学への積極的な受入が期待されています。加えて、増加する不登校児童生徒やその経験者にとっても、夜間中学は将来の進学等に向けた希望となっています。

夜間中学で学んだ生徒の感想



☆新聞で夜間中学校を知り、やっと17歳にして中学生になる事ができました。定時制高校に入り、24歳で会社員となり、給料も倍になり将来が明るくなりました。現在は3人の孫と楽しく暮らしています。

☆私は、10ヶ月前に日本に来ました。区役所に父と相談に行って、夜間中学を紹介されました。家の近くにあってよかったです。毎日学校に行って、数学、英語、日本語と漢字の勉強を頑張りました。高校に受かることができました。みんなと勉強したり遊んだりして楽しかったです。将来はプログラマーになりたいです。

☆スーパーで3割引の値札を見て、幾ら安くなっているのか解りませんでした。今問題を1つ1つ解くことが楽しいし、給料の明細を見て残業あまり出来ない状況ですが、内訳を毎月見るのが楽しいです。

☆読めない、書けない、恥ずかしい。市役所からの案内が分からぬ、このままではいい事一つもない。思い切って夜間中学校に様子を見に行きました。同じ事で悩んでいた人が喜々として学んでいます。私の事を当たり前のように受け入れてくれます。楽しく学べます、頑張って資格を取っていきます。亀さんのように一歩一歩ですが車の免許も手に入れるぞ！

